令和５年度第２回　檜山圏域障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会　議事録

日時　令和６年１月23日（火）
13:30～16:00
場所　檜山合同庁舎　４階講堂

１．開会

（菊池主査）

それでは令和５年度第２回檜山圏域障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会を開催いたします。皆様天気悪い中集まっていただいてありがとうございます。議題としてはですね、前回夏に引き続き二つありまして、障がいのある方への意思決定支援についてというものと、地域課題の８０５０問題というものを考えております。それぞれ約１時間程度で時間を考えておりまして、意思決定支援についてはですね、おととしあすなろ福祉会の方でいろいろニュースになったことから、障がい者の方の意思の決定をどのように支援するかというもので、その中でも特に子どもを産んで育てるという部分が檜山ではクローズアップされたということで、それに関する取組を紹介できればと思っております。

２．議題（１）
障がいのある方への意思決定支援について

（菊池主査）

ということで１つめの議題を、課長の方からよろしくお願いいたします。

（小野寺課長）

今日は皆様集まっていただき、ありがとうございます。今日は部長の方が所用で不在になりますので、ご了承ください。いまお話がありましたけれども、前回８月の地域づくり委員会では、国の意思決定のガイドラインだとか、割と結構細かい内容で、どういうふうに意思決定をくみ取っていく、流れですとか、考え方自体というのを説明させていただきました。それ以外に松田弁護士さんの方から意思決定支援の重要さを成年後見制度の事例を通して、どうやって聞き取っていくかというのを説明してもらいました。今回は、昨年度管内で障がいのあるカップルの不妊治療の報道がなされ、関心が高まっておりますけれども、実際に他の町からの意見では障がい者の方で、出産した事例はないですよということで伺っているところです。どう対応したらいいかわからない、ケースがないのでわからないとの意見もありました。今回は、それを踏まえて、実際に妊娠・出産・育児をした事例を紹介しながら、

その中で、それぞれの年代においてどのような課題があって、どういうふうに子どもを育てていっているか、お話しすることで、障がい者が自分の意思を示しながら関係機関と協力して子育てしていく過程を紹介したいと思います。資料は今西さんとやりとりして作っているところなんですけど、まだ完成でありませんので、ご意見も伺えればなと考えています。なお、今回の事例の対象者は、ご両親のことですとか、個人情報のことで広く知られることを希望していないと。ただ、あまり曖昧な例だけを出すと、皆さん議論をする時になかなか具体例として思い浮かびにくいなというところもありましたので、個別の記載内容は一部変更している箇所があるんですけれども、基本的には具体的に書けるところは書いていくようなかたちで示しております。なお、個別の記載内容は一部変更しております。
それでは、具体的な事例について、今西コーディネータに説明をお願いします。

（今西地域づくりコーディネーター）

地域づくりコーディネーターをしています、今西です。今金町の相談支援事業所ひかりで相談員をしています。皆さんとは何度かお会いしていますので、はい。いまお話があったとおり、去年のあすなろさんの理事長の発言じゃないですけれども、障がい者が子どもを産んで育てるというところに、非常に皆さんの意識と言いますか、産んじゃだめなんですかみたいな、そこに話がいっちゃって、私も色んなところで話を聞いてて、やっぱりなかなか出産して育児してる人って少ないです。障がい持ってる方でっていうのはなかなかそういうケースはなくて。やっぱりケースがあるとどうしても、今お話があったように、家庭環境だったりとか、生育歴であったりとか、すごくそこが注目の的になってしまうところがありますので、いま皆さんに差し上げたこのケースに関しても、どうやって育ててるんですかっていうところ。そこに支援してる人だったりとか、地域の方々がどんなふうに関わって、どんなふうに本人たちは自分たちの力で、いま、まだ現在進行形なので、頑張っているんですかっていうところをお知らせできたらなと思って。本当にこれまだ完成版じゃなくて、いじらなければいけないところが多々あると思いますので、お願いしたとおり、まず委員の皆さんにということで、ここで目を通していただいて、ちょっとそれは表に出さないで、伏せておいていただきたいなという資料にしていただきたいと思います。

（※資料説明）

（小野寺課長）

はい。ありがとうございました。私のほうからも補足でいくつか話をさせていただきます。先ほどその他の中でも触れられていたと思いますけれども、性教育に関して、夫婦が一緒に生きる幸せを大切にするような、妊娠への理解につながってほしいとかですね、以前の市町村とか事業所との会議でもそういう知識が無い人が多いといったお話もありました。以前、新聞なんかでも、実際には妊娠の経過は取り扱わないといった歯止め規程があって、なかな

かそういったことを教えられないとか、それに対する反対意見とかもあったり、色んな意見が出ているところでもありますけれども、こういうふうに出産育児をするときにこういった知識があったほうがいいと考える意見も出てきています。その他の次のページの、関係機関との連携というところですけれども、大まかにピックアップしたり一部変更したりしているところもありますけれども、妊娠から出産までということでご夫婦を中心に関係者の連携を書いているところです。下の方に書いているような相談支援事業所が、色んな調整の時に間に入ってスムーズに、話をするときに入ってもらったおかげで色々進んでいったのかなとお話を聞いていて思いました。妊娠から出産のところでも、子育て支援グループといったグループの中で、保健師さんですとか、役場の福祉課、教育委員会、そういった方々が意見を持ち寄りながら、主に保健師さんや福祉課の調整が多かったようですけれども、関係者が立ち会っている中で育てられている。先ほどの町営住宅の話なんかもありましたけれども、地域のサポートが大きいのかなと感じました。障がいは個別性があるので、単純にこれでできるから皆さんできるということではないですけれども、こういった状態の方、例えばこの方だったら旦那さんが運転ができたりとか、会社のサポートが得られたりだとか、中でも、足りない部分があれば子育て支援グループですとか、役場との調整に相談支援事業所が立ち会ったりとか、職場とか周りの友人なんかも関係して役割分担をされていると。1枚目に、関係機関との連携ということで、小学校からという記載がありますけれども、実際には支援グループの会議というのは小学校の前までに限られていて、そのあとは子育て支援グループのような関わりではないので、距離をとって見守るような感じのサポートになっていっているということでしたね。今回、意思決定支援ということなので、一個お聞きしたいと思ったのが、ご夫婦の意向をうまく聞いていくときに、どんな方法で本人たちの意見を聞いたとか、引き出していったとか、なにかそういった工夫があればお聞きしたいなとおもったんですけども。

（今西地域づくりコーディネーター）

こちらからあまり選択肢を見せたりとか、回答を促すような質問は避けるように心がけていました。ここの場だけでお話したいことは、この2人の妊娠がわかったとき、産んでどうするの、という意見がたくさんありました。本人たちも、やっぱり産んだらだめなんだよねというような、最初にそういう言葉があったものですから。でもこれって全然不思議なことじゃなくて、きっとこういう問いかけがあるんだと思うんですね。そういう言葉をかけた人がどうこうではなくて、やはりまだまだそういう社会なのかなって、障がい者が子ども産むっていうことは、育てられるの本当に、とか。やっぱりそこにいってしまうと言いますかね。前段にそういうことがありましたので、常に私は2人の思いはどうしたいのっていうところは聞いて、それから思い、願いなり、叶えるためにはどうしなきゃないかねっていうようなもっていき方を心がけていましたね。

（小野寺課長）
クローズドクエスチョンではなくオープンに意見を言えるようなかたちで聞くようにしてた。

（今西地域づくりコーディネーター）
そうですね。あとまあ、相談支援事業所が常に開いてますって、こういう状態が良いのかなって。いつの何時でこういう会議をしますみたいにすると窮屈さがあるのかなっていうことで、そういう会議も多々ありましたけれども、相談室に来て、居たらお話しできるよっていうようなオープンなところは見せていましたね。できないときはできないって言ってましたけども。保育園の帰りちょっと寄りました、みたいな感じで来たり、そういうときにも意外と核心と言いますか、2人の本音が聞けたりするものですから、そういう環境っていうのは、行政とは違う相談支援事業所だからできたのかなと。そういう関係、いまもそうですね。車あったからちょっと寄ってみたら居たね、みたいな。相談員と利用者さんという関係ではなくて。そういう関係はあまり今はないかなっていう気はします。

（小野寺課長）
多分前回の会議でも話があったと思うんですけど、支援する側がよかれと思ってこういう考えがあるよと言うのではなくて、あくまで本人たちが意見を表明して、それに対してできるできないというのをその後で考えるみたいな。

（今西地域づくりコーディネーター）
どういうふうにしていったらそれができるかねっていうような、お子さんに発達の遅れがあったっていうときも、「俺たちとおなじだね」みたいな感じで、十把一絡げみたいな感じだったんですけども、「いや、みんな違うからね」ということで、子どもにちゃんと向き合っていかないとだめだよねみたいな、ときには厳しいアドバイスをしたこともありますね。

（小野寺課長）
たとえば、意見を聞くときは相談員さんと1対1というか、他の関係者も入ったりすることもあったんですか。

（今西地域づくりコーディネーター）
たとえばこういうお話をしたいって言うときには、何人か関係機関に連絡してみたりしますけども、本当に「ちょっと寄ってみたさ」っていうときはやっぱり相談員しかいないので。でもやっぱりそういう雰囲気の方が話しやすそうな感じがするんですよね。お子さんの話になったときに、次こういう人にも入ってもらって、話聞いてもらおうかっていうような。そしてそこで本人たちの了承を得て、集まる人を決めて、こういう話をしようかっていうこ

とで場を作ったような気がします。

（小野寺課長）
逆に色んな人が来ることで緊張しちゃうというか、そういうこともあるから、ふらっと寄れて、言いたいときに言える場所があるってことで、本人たちの意思表明が円滑になるっていうこともあるんですかね。

（今西地域づくりコーディネーター）
きっかけはそこかなって感じがしますね。

（小野寺課長）
わかりました、ありがとうございます。あと、いちばん最後のページに初動対応とあるのですが、それぞれの時に気になったところと言いますか、今後また同じ事例があった時に、たとえば妊娠中とか、区分に合わせて、どういったことを気にしたらいいかなっていうのを今西さんの方でピックアップしていただいているところですね。今回役場の方も来て頂ければ意見も聞こうかなと思ったのですが、またあとででもいいので、こういった項目も聞いた方がいいんじゃないかとかご意見があれば、広く。まだこの資料は完成ではなくて、正直言って色々探したんですけど、障がいの方が子どもを産んで育てるっていうのはなかなか全国的にも資料が無いところではあったんですよね。広くこの事案が報道されたこともあって、地域で色んな動きがあるんだっていうことを見せたり。子どもをもつことでそれぞれが成長したり考え方がかわったりするところもあったんだろうなと。変わらないところもあれば変わったところもあったんだろうなと。そういったところも資料として見せればなと思ったところです。あとは、それぞれの区分では、気になったところをピックアップしていますけども、皆さんからの意見あればどんどん増やして、他のところがもしこういう事例があったときに、こういうところを気をつけるんだよっていう参考になればいいかなと考えております。だいたい資料を説明させていただきましたけども、大体３０分強ですかね、お話させていただきました。前回は国の資料なんかで専門的な話も多くてあまり意見も出なかったところではあるんですけれども、今、私や今西さんが説明した中で気になった点ですとか、こういったことを聞いてみたいなということなどなにかありますでしょうかね。この辺がわからなかった、でもいいかなと思います。参考にできれば意見を聞いて膨らましていったり中身をわかりやすいものにしていきたいと思っていますけども。大口さんとかどうですかね。聞いた上でご意見等あれば、どういったことでも構わないですけども。

（大口委員）
意見とか質問じゃなくて、感想で言えば、本人たちの意思を大切にした対応をしていていいなと思いました。初動対応の中身を見ても、私たちも、こういう立場になったら思うことで

すよね。その時に、その人が何を希望しているのかっていうことを聞き取って進めていたのがすごいなと思って聞いていました。

（松田委員）

感想的なところにはなってしまうんですけども、子どもを産むというのはすごく大変なことで、未成年がこれを言い出したらみんななんて思うだろうというところで比較して考えてみた時に、子どもを産むっていうのは費用も体力も周りの協力も必要だし、本人の計画性だとか色んなことが必要になっていく上で、周りの支援とかも含めた上で本人たちが乗り越えて行けるかどうかを考えるのが議題ですよね。とくに未成年だったら「あんた学業どうするの」って言われると思うんですよね、学生さんだったら。それはなぜかというと本人の利益を考えていて、本人がまだ考え方が未熟だから、簡単に育てていけると思ってしまってそういうことを言っているというところが出てきたりするのかなと考えていて、それと、必ずしもパラレルじゃないですけども、パラレルのように考えた時に、何をしたらよいのかっていうのがなかなか難しいなと思っていて。もちろん障がいには色々程度もあって、使える支援とかにも限りがあって、社会の理解というのもどの程度得られるのかというのもあって。ただ、障がいがあろうとなかろうと、子どもを産むというところで考えた時に必要となってくるのは、先ほど申し上げたような、費用、体力、周りの協力とかだと思っていて、いわゆる健常者が子どもを産むことに関しても同じように考えることだと思うので、障がい者だからといった見方ではなく同じように接して欲しいというふうに、それこそちょっと厳しいような、「あなたはどう考えるの、どうしていけると思うの」という問いかけも、本人に考えていってもらうというのも必要になってくるのかなと。それって本人が、障がいがある上に乗り越えられない部分については支援をしていけばいいのかなと。障がいがゆえにではない理由で乗り越えられない部分がある場合は、諦めるという選択もあってしかるべきなのかなと。その辺の区別というのは必要になってくるかなと思ったんですが、それを、一般の人でも難しいのに、障がいをもつ方に説明して理解してもらった上で自分の方針を決めてもらうことはとっても大変なんじゃないかなと思いました。

（小野寺課長）

ありがとうございました。障がいのない方でも子育てってイメージとは違ったところもあると思うんですけど、なにか配慮する上でこの辺が難しいなとか、今西さんの方でなにかありましたかね。

（今西地域づくりコーディネーター）

たとえば、この方２人のことを私がなにも知らない状況で相談支援事業所に「子ども産みたいんですけどどうしたらいいでしょう」って来たケースとは全然違うんですよね。支援学校に行っている時からの関わりで、２人の性格もよく知ってて、どちらかというと私が支援す

る立場で、まだ子どもの、１８のころから知っているわけですから、大人になる過程っていうのをサポートしてきた２人ではありますよね。年金の手続きの２人とも私がしたんですけども、やはりそんななかで、２人のこと、年金もらっているとか、働けているとか、通院状況だったりとか、そういう今まで付き合ってきた数年の関係があったのでこういう支援ができたと思うし、２人にも聞き出せたし、話が出た瞬間に「お金的には問題ないかな」とか、そういうの頭にパッと浮かびましたよね。全く関係、情報がない知り合いでもなかったっていうひとだったら果たして私がこのように支援したのかなというのは、私も分からないですし、関係があったから２人は言えたのであって、もしかして言えなかったかもしれない。黙ってたかもしれない。そういうのもありますので、関係ができていたというのは大きかったと思います。未だに、ふらっとくるんですね。いついつ話があるから行っていい？というのはあまりないです。私の車があったから寄った、とか。やっぱりそういうところなんですね。そこがやっぱりこの２人の弱さであって。じゃあ私がいなくなったらどうするの、っていうところありますよね。なかなか、広げていく難しさだったりとか、相談員だったら誰でも良いのか、そういうわけでもないという、その辺弱さだったり難しさっていうのは、一般のひととの違いかなと思います。自分から発信っていうのは難しい。勇気がいることなんだなっていうのは思いますね。

（小野寺課長）

導入のところにもありましたけど、相談支援事業所に顔を出すっていうこともあるし、過去に関係があってできたということもあると、いまお話を聞いていて思いました。障がいあるなしに関わらず子育て自体はすごく大変だったり、親とかのサポートが必要になることもありますので、意思を表明してそこをどうやってくみ取っていくのかっていうのはより難しいところもあって、こう話題になっているところもあると思いますけど。２点ほど出していただきましたけども、他になにか委員さんの立場でお話したいこと等ありますかね。

（佐藤委員）

質問になるんですけども、今回のケースは、相談支援事業所が近くにあったり、元からお知り合いで、ずっと付き合いがある中で相談できるっていうのもあると思いますが、結婚をして、その機会に、転居をしてきたとか、相談できる場を知らないケースは多いんでしょうか。

（今西地域づくりコーディネーター）

結婚に限らず、相談員が、今だったら役場が直営でやってる場合もありますし、必ずしも行政と離れたところに事業所があるかっていったら、必ずではないと思うんですけど、相談員っていうのは町には必ずいるという状況です。やはりそういう機関があるっていうことを、こういう人じゃなきゃだめとか、こういう話じゃなきゃだめとか一切限定したものがなく、話をしにいけるところがあるっていうところはまだまだ周知されていないと思います。転

居したりとかすると、今までそういう人がいるところにいたとしても、別の町に行ったら、誰が教えてくれるんだろうって、そういう方はまだまだ居ると思うんですよね。だから、今金は４学校あるんですけど、先生方には、卒業の時に、必ずそういう人がどの町にもいるっていうことを教えてねって。学校があると、在校中からこういう風にうちと関わるんですね、生徒さんは。そういう人はどこの町にもいるっていうのは、先生には言ってますけども。こういう話だからいかなきゃいけないとか、こういう話はしちゃいけないとか、そういうことじゃなくって、行けるところがあるよっていうのは伝えて欲しいなっていつも思っています。やっぱりなかなか、知らない町に行って一歩が出ないっていうのが現実だと思います。

（大口委員）
保健師さんどうしでそういう連携があるんじゃないですか？

（今西地域づくりコーディネーター）
ご本人さんたちがそういうことを伝えなければ、今まで保健師さんが関わってたとしても、本人さんたちがここの町に行くので、保健師さんから保健師さんにっていうのをある程度お願いしない限りは、なくなってしまうのではないですかね。切れちゃうというか。やっぱり子どもと大人では全然違いますし、ご本人さんたちほ今後もそういうサポートなり、関係機関とつながりたいって思いがあるっていうのは大きいかもしれないですね。結構電話で探して、「町に来たんですけど、前こういう支援を受けてました」って。行政に相談しに行く人もいますし、調べたら相談支援事業所ってあったので電話しましたっていう方もいます。そういう支援を受けたり、関係性が作れてた人は、町が変わっても、そういう人がいたらなあとか、希望する思いがあるから、探すんだと思うんですね。行政にも行くし。まず行政に行ったらすぐこういうところありますよって言ってくれるので。本人が希望するかしないかって大きいかもしれないですね。

（大口委員）
たまたま近所の人が、知らない子を連れて私のところに来たんですよね。何年も前ですけど大晦日の日に、まだ１年生にもならない子が１人でお店に買い物に行って、途中で困ったことがあって、それを近所のおばさんが見つけて、私のところに連れてきたらなんとかなるのではないかということで連れてきたんですよ。その子と色々話をして、自分の家に帰れるのって聞いたら、帰れるって言うので、一緒に近くまで行ったんですけど。そしたら一ヶ月くらい前に長万部から引っ越してきたんだって言うんですよね。家の中に入るのを見届けて戻ったんですけど、気になったので、後から保健師さんに連絡したら、長万部の保健師さんの方から、見てくださいって連絡来てましたって。そこに行ってくれて、対応してくれたんですよね。そういうシステムになってるんだとしたら、より安全、安心なんではないかなと思ったんですよね。

（今西地域づくりコーディネーター）
子どもと成人ではちょっと違うかもしれないし、障がいの度合いによっても違うでしょうし。ただ、療育手帳とか持ってたら、引っ越し先でそれを提出するので、なんとなく行政も把握できますよね。そういう方が町に来たねっていうことで。

（小野寺課長）
色々意見ありがとうございます。なにか他にご意見ありますかね。今回事例出したのは色々個別性もあるっていうお話もあったんですけど、どうだったらできるできないっていうよりも実際にこういうケースがあって、関係機関がこういうふうに関わって、できることできないことあると思うんですけど、今、小学生に至るまでこうサポートしながらやってますってことなので、もしそれぞれの町とか、そういう事例がないっていうときに、こんなふうにやってたっていう一事例があっただけでも、多少寄って立つところになるのかなと思って資料作成しているところもあります。なので、皆さんから色々意見もらえれば、それを反映したりできるんじゃないかなと思って情報提供したところでありますので、またなにか今後追加で情報等あればまたいただければと思っておりますので、一本目の議題についてはこれで終了したいと思いますけれども。

（田畑地域づくりコーディネーター）
先ほど大口さんが言っていたように、子どもに関しては結構私も保健師さん達と協力して、例えば他町に移るときには情報提供を、保健師さんは保健師さんに、私は次の相談員さんに情報提供して切れないようにしていくんですけど、やっぱり大人の方になると、なかなかそれを伝えるとか、何かサービスを使わないと伝えづらいなっていう部分もあって、切れがちになるのかなと思っていました。障がいだけじゃなく、普通の人が誰でも思うようなことと同じなんだなと、障がいのあるなしに関わらずだな、と思いながら聞かせていただきました。ありがとうございます。

（小野寺課長）
今日は色々事例を発表していただいてありがとうございました。またなにかございましたら意見いただければと思います。では一本目の議題についてはこれで終了したいと思います。

２．議題（２）
地域課題「8050 問題」について

（菊池主査）

それでは、地域課題の「8050 問題」についてというのを引き続きやらせていただきます。よろしくお願いします。今回この話について話し合うのは４回目になります。一番最初はおととしの８月ですね。

※概要説明

今回、どういう話し合いをしようかというのが、はっきりとした答えをなかなか出せない問題だというのはこの２年間を通じて感じているところでして、今まで話し合いをして色々な意見を、皆さんの職域の立場や知識を踏まえて挙げてもらったので、それを何らかの形でまとめて、地域におろして、困っている方に届くようにできればいいのかなと考えておりまして、今回はそのまとめの話し合いをできればなと思っております。ということで、問題の起き方やそこに至る経緯も色々な要素があるのがこの問題の特徴ですし、親の高齢化がきっかけで発覚することが多いので社会的に８０５０問題と呼ばれています。その年代だけではなく、７０代４０代の方とか、９０代６０代とかもありますし、そこに至るまで、もっと若いうち、それこそ子どものうちから目配りをする要素もあるのではないかというのもあるので、そういう部分も話し合えたらというものになります。で、ちょっとここから難しいんですけど、檜山という、うちの地域の中でこういう問題がありますよと。一般的にこうだという部分から少し深掘りして、狭い地域ですので、ここではこういう問題で困っている人がいるよな、というのが出てくるかと思います。その中で問題の特徴ですとか、関係機関がどういう関わりができるのかというのを皆さんから意見をもらって、まとめとして作りたいなと思っております。８０５０問題というと、高齢者と高齢者の一歩手前の人という問題なんですけど、今までの話し合いの中だと、１８歳になる前と１８歳になったあと。やっぱり若いうちから目配りをする必要があるのではないかということで、２種類に分けてそれぞれの話し合いをすることで問題が少し洗い出されるのかなと。解決策と呼べるものまでうちで出せるかわかりませんが、気になるおうちがあれば、こういう相談先につなぐことができるのではないかとか、こういう部分に注意をして専門職が関わることができるのではないかというので、シートを２枚に分けさせていただきました。と言うことで、最初ですね、２つのグループに分かれて、１８歳以前の部分と１８歳以降の部分とで要求される知識というか、どういう風に話せば良いかっていうのも、混じると難しいかと思って、２つに分けようと考えていたんですけど、今回、来られない委員さんが多くて、人数的にも６人ならばまとめて色んな意見を出してもらえるのも良いかなと思って急遽段取り変えさせていただきました。このグループひとまとめでやらせていただきます。基本的には今まで話してきた話のおさらいと、いくつかの問題点を絞って挙げさせていただいたので、それに対して新しく気になる点があったら追加してやりたいですし、この問題に関してはこういうふうに取り組むのがいいのではないかという意見があれば書き出していきたいと思います。

最終的にどういう形で発信するかというのが、今日ここで決められないところではあったんですけども、地域づくり委員会の活動の記録が、うちの振興局の HP で公開するものになるので、そこで、こういう話し合いをして、地域にこういう問題があって、こういう相談先がありますというのを公開するのがひとつできるのかなと思っています。振興局の HP だとどうしても検索する人が少なくて、あまり人目に触れないので、管内の町と相談して、この取組を町ごとで紹介をしてもらうと、町民の目にふれて、少し困っている人に情報が届くようにできればと考えております。それに至るまとめということを今回やりたいなと思っております。皆さんなんとなくイメージはつかめるでしょうか。ちなみに、おととしの夏、最初にこの８０５０問題をこの委員会でやりますと言った時に、この問題をご存じかと聞いたところ、委員さん８名のうち２、３人だったと思うんですね、知っていたのが。今は皆さん結構、８０５０問題の、一面的でない、ディティールというか、全体像が見えてきていたら嬉しいなと思うのですが、色々な意見があって、色々な問題があって、ひとつのことばでは説明できないということがわかるようなまとめを作っていけたらなと思います。テーマ１と２ということで、シートが２つに分かれているんですけど、１８歳になる前までと言うのがひとつ大きな分かれ目になるのかなということで、ここで分けています。今までの話で課題点になりそうなのを主に４つ挙げさせていただきました。一個目が、子ども時代に、発達の遅れや知的な障がいが疑われる子どもがいても、支援する機関が変わるタイミングで情報が失われやすいと。幼稚園・保育園から小学校、中学校、高等学校という、タイミングの切れ目で情報が切れやすいというのが、最初に佐藤さんと大口さんから話があって、８０５０問題というのが一面的ではない、根深いものがあると感じたので、出させていただきました。最初に言っていただいたのが佐藤さんだったと思うんですけど、やっぱり難しいところは変わらずある？

（佐藤委員）

例えば、小学校の段階で特別支援級に在籍していて、そこで作ってきた支援計画や指導計画はもちろん中学校に引き継がれていくんですが、その後、高等養護学校に行けば引き継ぎはされると思いますが、普通高校に行く場合だと、この辺だと定員割れしている普通科が多くなってきているので、そうなったときに、どこまで引き継がれているかっていうのは、小学校段階の立場としては、わからないところはあるので、心配かなと思っています。

（菊池主査）

高等養護に行くお子さんとかだともう少し引き継がれる？

（佐藤委員）

そうですね。そのケースが多いと思うんですけど。

（大口委員）
檜山北高校だと、支援学級にいた子が普通高校に行きたいってなると、かなり詳しい引き継ぎがされると思います。コーディネーターがいるので、そこの連携っていうのはやられていると思います。町内に連携協議会というのがあるんですよね。認定こども園から小学校、中学校、高校の先生たちや専門の人も入った連携協議会の中で、経過が共有されたりというのもあるので、今は私はそこにいないのでどの程度っていうのは分からないですけども、ある程度の引き継ぎはできているかなと思います。

（菊池主査）
どこの町でもそれがあるかっていうのはわからない？

（佐藤委員）
小、中、養護はあるんですけども、高校は今江差にいますけど、江差はどうかな、高校の方が入ってっていうのは聞いたことがないです。

（菊池主査）
どうしたら支援すべきかまで話し合えたらいいんですけど、なかなか個別にやってくと。答えが難しいと思うんですよね。こういうところが機能したらいいねって、たとえばせたなの連携協議会というのがあって、そこで支援が途切れずにあるよというのを紹介できたら、他の町もそれをヒントにしてできたりすると思うんですよ。おそらく今日は紹介だけでとどまるのかなと思うんですけど、そういう形で意見を挙げていってというまとめになるのかなと思います。

（今西地域づくりコーディネーター）
今の課題点で、１番の項目に対して、佐藤さんと大口さんが話してくださったことは、背景だと思うんですね。なんでこんなことが起きるのかって。なんで連携できずに情報失われるのかなっていう背景。特別支援学級にいたお子さんでも、高校で普通校に入学できるという現状ですよね。それはあくまでもご本人さんなり、ご家族の選択だと思うんですけど。それがだめということではなく、背景にはそういうことがあるよねと。そこはあくまでも、自分たちの選択肢の一つで、自分の意思決定できる選択肢があるというね。それが良い悪いではなく、そういう背景にはそういうことがあるねってことだと思うんです。このテーマが大きすぎてなかなか皆さん意見が出しづらいと思うんですが、絞って、背景を探るみたいな、だからその時に連携協議会みたいなのがあれば、そこに途切れがない関係機関すべてのコーディネーターさんなりが参加すると、切れないで引き継ぎがなんとなくできていくのかなみたいな。問題課題に対する背景を探ってみるのはどうでしょうかね。今話していただいたことは背景を探っていただいたのかなと思ったので。

（小野寺課長）
小学校、中学校とかは、集まる機会があるんですか。

（佐藤委員）
町単位にはなるんですが、幼稚園、保育園、小中学校の先生と教育委員会と保健師さんが入る会議があるんですけど。

（小野寺課長）
それはどんな会議になるんですか。

（佐藤委員）
町ごとなので、江差町でいうと、教育支援専門会議という。2つにわかれてまして、1つは、通常の学級で、障がいを抱えていたり、課題がある子の情報共有。こういう支援をしていますという交流ですね。あと、特別支援学校に在籍している子の情報の引き継ぎをする会議があります。

（小野寺課長）
そういう集まる会議が、中学校まではあるけど、高校になるとなかなか共通の場所っていうのはない感じなんですね。

（松田委員）
今、連携協議会という話を聞いて、私、月に一度、乙部と厚沢部でケア会議というのをやっているんですけれども、それが何かって言うと、高齢者の方が普段、どういう生活をしていてどういう状態にあるかというのを、福祉関係者の方が集まってみんなで情報共有するっていう会議なんですね。参加するのが病院の看護師の方、包括の方、ケアマネさん、介護施設の方とかみんなが集まってやるんですけども、「何町の何さんが今日、ケアマネさんが見に行ったら倒れていたのでどこの病院に入院しました」というのを逐一報告しあう会議をやっているんですね。小、中、高校だと規模が大きくなるのかもしれないんですけども、特徴的な子はそんなに多くないと思うという意味では、月1じゃなくても何ヶ月かに1度そういう会議をして共有をはかるというのは考えられることなのかなと。その中で名前が出てきた子に関しては、高校はどこかの私立に行っちゃいますとか、道外に出ちゃいますとか、そう言う場合には何らかの対策を打てないかっていうのを、私のような法曹が入っていれば、個人情報で後々問題になってくるかもしれないから何か対策とっておこうとか言う話ができると思うんですね。こういう限られた地域であるからこそできることだと思うので、できたらいいのかなと思います。

（今西地域づくりコーディネーター）
各町まわって協議をするんですけど、高校進学とか就職で町を出ちゃって、そこで切れちゃうんですね。そこから戻ってきた情報がどこにも行かない。引きこもっている方が潜在しているっていうのは、町まわっていたら必ず聞きますね。どの町からも。出るときはある程度引き継ぎして出たとしても、戻ってきてから家に来てたっていうところで、関係機関が気づかない。家族、本人が発信しないとわからない。そういう背景がありますよね。

（松田委員）
出る前から問題があった人とかですか？だとしたら私が考えるのが、行く先に、「この人こういうところがあるので、出た後には内部の状況をここまで連絡してください」というのを、行く時に予めなにかしておけたらいいのかなと。書面でのやりとりになると思うので、そこまで濃いつながりにはならないと思うんですが、そう言っておくことで、行った先からも関心をその子に向けてもらえるだろうし、出た後にも、一定の情報はもらえるのかなと。そんな気はしますね。

（菊池主査）
行き先っていうのは、就職先に書面を送り込むという？

（松田委員）
就職しちゃうとたしかに難しいなという気はするんですけど、それでも本人が何らかの自覚があれば、本人の同意書をとっておいて、この子がなんかあったときにはここに情報を下さいみたいに言っておくっていうのも一つの手なのかなと思います。未成年の場合だと細かいところを言い出すとキリが無い気がするんですけど、一つの例として、「情報を下さい」と。それを妨げられる要因を、なんとか取り外そうという方向ですよね。

（田畑地域づくりコーディネーター）
さっき佐藤さんが言っていたように、養護高等学校だと、比較的情報交換はできるけど、私今回結構、江差高校さんとのやりとりもあったんですけど、本当に情報交換ができなくて、こちらから、「こういう方行くのでよろしくお願いいたします」って言っても、あちらから特に何か返ってくるわけでもないですし、こちらからの情報も大して周知もしていないんだろうなと感じたりして、温度差があるんですよね。こちらの、こういう状況なのでお願いしますっていう情報と、あっちの捉えてることの温度差がすごくて、うまく連携がはかれないっていうのが最近結構、中学校なんかで思っていることなんですけど。特別支援学級に入っててこういう状況だって言っても、学校としてはこういう考えもあるんですっていうのもあるので、小学校のような協力体制で行くっていうのは、一回中学校で崩れてしまって、

それを構築してもう一回高校に行こうと思ってもまた高校で崩れちゃって。最近どうやってつなげていこうかという相談員の思いもあるんですけど。なかなか普通高校に行くと途切れちゃう。3年生でどこに就職するかとか、情報を自分で聞き取りしていかないと、あっちからの情報はほとんどもらえないなって思っています。

（松田委員）
それは、何でこちらが宜しくと言っているのかも、高校側としてはあまり理解していないということですか？

（田畑地域づくりコーディネーター）
一応情報提供で、こういうふうな問題があって、こういうふうに関わってきましたと伝えるんですけど、高校はそこまで見ていない感じなんですよね。大して、家族がどうなっているとか、背景まで見るってことは、高校としてそれほどないのかなと。もう義務教育でもないっていうのもあるので、来なかったら来ないで終わりですみたいな感じがどうしても普通校はあるのかなと思う。

（今西地域づくりコーディネーター）
私たち支援者側って、よかれと思ってやっているんですよね。そのお子さんが、心配な言動を起こしたりとか、そうなったときに、こういう生育歴がありますとか、伝えたいじゃないですか。本人や周囲が困らないように。それと、学校もそうですけど、真ん中にいるはずの本人がどうなのかなってことなんです。そこまで本人・家族が思っているのかな。意外に蓋を開けてみたら「うちの子は普通高校に行ったんだからもういいです」という親もいるんですよ。今まで特別支援で色々支えてもらったんだけども、うちの子はもう普通高校に入ったんですと。気持ちが離れるという。本人も家族も。これが現実です。つなげていきたいという私たち支援者側と、それも温度差なんですよね。本人・家族が同じ思いでいるかっていったら意外にそれは違いますね。私も、高校行ってからも先生から連絡もらって、随分関わってますけど、本人あまり困り感を感じていない。「なんで今西さんと僕話してなきゃないの」みたいな。先生方が思っているほどじゃないなと。前から見ると、学校とすごく関係ができたんですね。私たちは、関係機関と支援がしやすくなったんですよね。でも本人は普通高校行った途端に、「もう障がい者じゃないよ」と、そういうのを感じるんですね。それも温度差。本人が真ん中にいないよねみたいな。疑問に思うときがありますね。

（松田委員）
状況に合わせて対応の仕方を変えていくっていうのが大切なんですかね。本人が、関わって欲しくないというときは、見守り体制に徹するというか、情報だけは細々と引き継ぐみたいな。見守りが必要になってくるんですかね。

（今西地域づくりコーディネーター）
支援の内容って変わっていきますよね。見守りっていう時期もあるのかなと。何か出てきたら、そこで切れていなければ支援ができるんですよね。

（大口委員）
私が最近思うのは、障がい者が健常者に合わせるという動き、意識がまだまだ強いと感じるんですよね。障害を持っている本人が、「普通高校に行けたということは、自分は障がい者じゃないんだ」というような。本当は、障がいあるなしじゃなくて、その子の特性に合わせた教育がされればいいんですけど、そこがまだまだ先生達のなかでも、健常児に合わせようという先生も多くてですね。親も本人も勘違いしているというか。そのあたりを、今の教員と話してて思うんですよね。不登校の子に対しても、「学校に来ないからどうしようもないんだ」と。じゃあなんで学校に来ないのかを、学校側としてももっと深く見て欲しいなと。学校が楽しくないから、受け入れてもらえないから行けないんですよね。そのあたりを深くがんが得て欲しいなと思います。ひとりひとりの特性や個性が活かせる学校であれば、全体の認識も変わってくるのかなと。学校全体にそういう余裕がなくなっていますよね。

（佐藤委員）
特に中学校の先生と話しているときは、進路問題がすごく大きくて、小学校から引き継いだとき、中１の秋頃から、普通高校にするか養護学校にするか、小学校の段階でも進路の話をしてくださいっていう流れになってきて、親としては現実を突きつけられているような感じで、余裕がないという部分では中学校も感じているとはよく聞きます。

（松田委員）
障がい者というくくりがあるのが良くないのかなと。グラデーションであって、どこからが障がい者ですっていう風には絶対ならないと思うので、グラデーションの中で考えるべきであって、障がいかそうでないかという分け方をしてしまうから、嫌だとか、自分はそうじゃないとか、そうかそうじゃないか、白黒って考えてしまう部分があって、そうじゃないんだよと。適材適所、個性に合わせてという考え方をしていくようにするには、区別っていうのが悪さしている気がしますね。どうしても手帳とかを持って、支援を受けようとすると、どこかで区切りをつける必要があるのかもしれないけれども、これは理想論かもしれないけど、学級でも同じ学年の子はみんな同じ学校に入って、教える段階が違うのであれば、クラスで分けるとか、最終的にはそういう形になると、みんなが障がい者かそうでないかという考え方を持たずにいれるのかなと思いました。

（今西地域づくりコーディネーター）

背景はそんな感じしますよね。特別支援で３年間過ごして、普通高校を選んだお子さんが、私に、「ぼくは障がい者じゃなくなった」と言ったんですね。そうすると、周りは誰もそのお子さんを障がい者として見なくなるじゃないですか。まあ、知ってる人は小さな町はいますけどね。私はその言葉聞いたときショッキングでしたね。「障がい者」という言葉でね。その子だって遅れがあるわけですから、困っていることはいっぱいあるんですよ。でもそこじゃなくて、「障がい者」っていう言葉に縛られちゃってて、そうじゃなくなった、その名前を取っただけでいいのかいと。なんかこれって間違ってるよねって。一部のお子さんがそう言っただけなんですけど、その声ってすごく、この仕事をしていてショックを受けましたよね。本人は困ってるわけですからそこをもっと拾ってあげて、なんでサポート、カバーするかっていうところを、教えてあげなきゃいけないのに、どれだけ障がい者という言葉が、本人を言葉で縛っていたか、それを見た気がしました。

（大口委員）
反対に、小中学校で特別支援には組み込まれなかった子が、高校卒業して就職したときに、なんかうまくいかないという子もいますよね。そういう子が戻ってきて、どこにどういうふうに助けを求めたらいいかわからないというのがあって、そこが私も、さっき大人のサポートっていうところで、分からないなと思いました。

（菊池主査）
その話は次のシートの１８歳以降の方で、テーマを切り出したところがあります。テーマ１ということで、１枚目の１８歳以前の方で４つ切り出しさせていただいているんですけど、まずこの４つ一読していただいて、発言していただくのが良いかなと思います。
（資料読み上げ）
親御さんとの関係とか、佐藤さんからも色々話があったところですけども、どうでしょう。

（佐藤委員）
意見というか質問になるんですけど、Ｕターンして戻ってきたときに、支援する側と受ける側で温度差があるとのことでしたが、拒否された時ってもう切れちゃうんですか。もういいですってなっちゃうと。一回外に出て、戻ってきて引きこもりになりました、だけどうちはもういいですってなると、行政や相談支援事業所も含めて、関係は築きにくくなってしまうんですか。

（今西地域づくりコーディネーター）
切れるということはないです。私たちが持っている情報が破棄されることはないので、ずっと残ってはいます。そういう人が町内にいたんだねということではありますけど、戻ってきて発信がなければ、身内や学校からの発信、本人・家族からの発信がない以上は、「帰って

きたと聞いたんですけど」と入っていくことはなかなか難しいですし、本人がどこに困っているかわからないと、私たちも支援の道筋が作れないといいますか、長い人生で見守りの期間みたいに「待ってますよ」という情報は親に伝えたりしていますが。あまり全く知らないというのは意外に無く、どっかから情報が入っていたりするものですね。幼少期だったり、学校行ってるときに全く情報をもらえない人は、分からないですね。

（佐藤委員）
子ども時代に障がいや難しさを抱えているお子さんは、自分を客観視するのが難しいという特性を持っていると思うんですが、それが自分が大人になってそれが必要だってことも、分かりづらいっていうのもあるのかなと思いますね。

（今西地域づくりコーディネーター）
本人の困り感ですよね。変な話、親がいないと絶対困りますよね。でも親と一緒に住んでて、本人が今、何かしたいという希望が無い、それすら浮かばないという状態だと、その家にいてご飯が食べられて、お風呂に入れて、という生活をしていると、これがベストという風になりがちかなという気はするんですね。親の姿勢じゃないですけども、親御さんが変わると子どもも出てくるケースが結構あるんですよね。親の意識が変わると、子どもも変われるという、そういう経験は何件かあります。関係が切れちゃうと、どのタイミングでつながっていくかはなかなか難しいかもしれないですね。

（菊池主査）
今の話だと相談支援事業所で受け付けるケースの話ですよね。となると、役場から情報や相談が来るって感じですか。

（今西地域づくりコーディネーター）
役場より学校の先生や近所の人が情報を持っていることが多いですね。

（菊池主査）
児童相談所でも基本的には一度関わったお子さんの情報はずっと持っています。その問題のあったお子さんが大人になって親になったときに、自分の子どもに対して関わりがうまく持てなくて、問題が起きるという事はあるので、一度関わったお子さんはずっと年を重ねても記録はあると。でも児童じゃなくなったときに、その人本人との関わりは切れてしまっているんですよね。親になって自分の子どもになにかあったときにあの人だねと。あの子が親になったんだねというのはできるんですけど、どこか行って戻ってきて、引きこもっているっていう場合には児童相談所につなごうっていう支援者の導線が出ないと思うんですよ。ただ、情報としての選択肢としては児童相談所も数えられると思います。

（今西地域づくりコーディネーター）
佐々木さんはどうですか、お話聞いてて。佐々木さんも支援が途切れたことあったよね。関係機関と全く離れた時期ってあるよね。そのときは不安とかなかったですか。

（佐々木委員）
結構その時、多分父さんも不安だったから、父さんから相談に行ったらと言われた。それ以上に自分が不安だったから、自分で相談する場所は浮かんでこなくて、どうすればいいか分からなかった。寝る前とか１人になると、考えらさるというか、次の日来るのが嫌だなとか。相談したいけどどこに行ったらいいかわからなかった。

（今西地域づくりコーディネーター）
結局、仕事辞めちゃってから、１人でずっといて、声をかけたのが学校の先生で、今繋がってるんですよね。やっぱり、自分からじゃないもんね。学校からだもんね。家にいるねって聞いてて、支援校の先生が声をかけて、今サービスを使いながら働いてるという。

（今西地域づくりコーディネーター）
学校に連絡しようと思わなかった？

（佐々木委員）
思わなかった。

（今西地域づくりコーディネーター）
やっぱり卒業したら切れちゃったって感じかな？

（佐々木委員）
先生からは来てたけど、あんまり関わりはなかった。

（今西地域づくりコーディネーター）
自分からは発信してないもんね。

（菊池主査）
誰かに助けて欲しいなとかはあったんですか。
（佐々木委員）
函館だったら、ステップとかめいしかなかった。たまにそこで、親には何も言わずに相談に行ったけど、あんまり取り合ってもらえなかったというか。

（今西地域づくりコーディネーター）
話の内容と、事業所の内容が違ったのかもね。

（今西地域づくりコーディネーター）
これが、普通校を卒業して家にいたら、学校の先生が行くってことはないと思うんです。支援校だったら、卒後何年とか支援もあるじゃないですか。だから、心配してくれてるっていうか、気にかけてくれたのかなっていう。きっと普通校だったらこういうことは無かったと思いますね。佐々木さんも能力が高くて、特別支援行くのか、普通校行くのか、悩んだタイプだと思うんですよね。色んな背景だったり、本人と支援者との温度差があったり、どんな風に関わっていったらいいのか意見いただけると嬉しいです。

（大口委員）
私の実感として、せたな町の中では、かなり親や親族が隠したいという風潮は改善してきたと思うんですよね、この１０年くらいのあいだで。一つは連携協議会のなかで啓蒙していこうということで、回覧板で障がいについての知識を回したり、前に重度の子を扱っていたときに、その子が小中学校を過ごし、今、函館の養護学校を卒業するんですけど、そういうのを分かってきた人たちが、自分の子どももこの町で過ごせるんだと考えだしたり、障がいを持っている人が身近にいるんだということが分かってきたというか。かえって、特別支援学級に入りたいという子が増えたんですよね。それがなぜなのか考えた時に、こども園と小学校と学童のコーディネーター会議の中で、今度１年生に上がる子で、手をかけて欲しい子の名前を言われるんですが、親が「支援級に入るほどではないんじゃないかな」ということでとりあえず通常級に入った子が居たが、結局１学期過ごして、子どもがついて行けなくなったんですよね、授業に。そしたら席の離脱が始まって、大声を出すなどトラブルが起きてくるわけですよね。子どもと相談したら、子どもが支援級に行くって言うんですよね。そしたら改善してきたという子が３人もいたんですよね。３人とも支援学級で力をつけてきているというのが目に見えて分かって、そういうのをみると親も丁寧に指導してくれる支援級がいいと思う人も増えたような。本当は、そういう子たちってもしかしたら、もっと学級に余裕があれば、そういう子をひとりひとり見られるような教員配置になっていれば、特別支援学級じゃなくて、通常の学級のなかで育っていける子たちなのではないかと思うことはあります。

（今西地域づくりコーディネーター）
さっき私が言ったケースがそうですね。それは、教育委員会が待ってくれたことが嬉しいです。それまで支援していた人たちは、明らかに遅れがあるわけだから、入学しても絶対差が開いていくって皆さんプロだからわかるじゃないですか。でも、家族なり本人はみんなと一

緒に保育園で楽しく過ごしているんですよ。なのになぜという感じ。そこを、待っていただけたというのは、皆さんの理解、協力といいますかね。でも。１年生終わったら明らかについていけなくなったんですね、勉強が。そこで、「分からない」という言葉が初めて言えて、教えてくれるクラスに行くと。親も、本人を苦しめたくないと。どっちみち、特別支援学級に入ったんですけど、わたしはあの１年は無駄じゃないと、それでやっと支援する側と受ける側のずれがなくなって、一緒に進んでいるという。長い人生を考えたらいいのかなと。

（大口委員）
無理矢理、支援学級に、じゃなくて、理解し合って行ったっていうのは私もすごくよかったかなと。

（菊池主査）
やっぱり待つことができたって言うのは、支援者がずっと関わって、情報を持って、入るべきタイミングで入るという見極めができたからなのかなと。

（今西地域づくりコーディネーター）
さっき出したケースは、ちゃんと手帳を持って障がい者として生きてきた方ですよね。でも障がいを持ってるお子さんの親御さんで、あれ？っていう親御さんいますよね。そういう親御さんって、たくさん言葉を持ってないし、こうだよって言われたらはいって言うしかないっていうのもあると思うんです。言えずに引いてしまうという人、みんなそう言うならそうかもって。そこを代弁する人が必要なのかなと。それが相談員だったり、保健師さんだったり、必要なのかなと。考える時間を与えるというか、本人が伝えられなければ伝える人って大事かなと思います。

（松田委員）
ちょっと切り口違うんですけど、困っている方や周りへの直接的な支援ではないかもしれないんですけれども、間接的にはなるんですが、８０５０問題の何が問題であるのかっていうのを、認識してもらうということが大事なのかなと思っていて、この問題は究極的にいうと社会性の喪失が死に繋がる可能性が高いということなのではないかなと私は思っているんですね。ということがみんなの中に共通認識として意識の向上ができたとしたら、社会性がなくなるということの兆しが見えたときに、これはなにかしなければならないと思うきっかけになるのではないかと思って、そういう風に考えたら、若干間接的ではありますが、８０５０のなにが問題なのか地域のみんなに知ってもらう機会があってもいいのかなと思います。

（石田委員）

支援の方法は色々あると思いますが、家族や本人が発信してくれないと介入が難しいなと思っていて。私は保健師をしているので、今は包括支援センターという介護のところにいるんですけど、前は母子保健の方にいて、乳児期はお母さんとの関係性が濃密で大きいので、その時期に関わりを持ったお母さん達とは時間が経っても繋がっていて、そのお母さんが自分の親の介護の相談をしに来るとか、そこでも繋がるんですけど、細く長く繋がっておくと、自分の子どもが大きくなっても相談してみようかなとかそう思える人がいたなというふうに思ってもらえるように、乳幼児期から関係を作っていくというのも大事なのかなと思って接してはいます。

（大口委員）
基本的な質問なんですが、大人のサポートは包括支援センターですか。

（石田委員）
その町によっても違うと思うんですけど、実際はっきりとは決まっていなくて、大人になったら包括みたいなところはあるんですけど、大人になっても母子保健の保健師がやってるっていうケースもあって、役割分担も定かではないです。

（大口委員）
イメージなんだけど、包括支援センターって老人の介護とかを担当してるのかなと思っていたんですけど、一回就職して戻ってきて家に居る人が何人かいるんですが、そういう人たちや親に、どこに相談しにいきなさいっていえば良いのか私もちょっとわからないので、そういう人自身も分からないから、１人で色んな講演会聞きに行ったりして探してるんですよね。相談機関の紹介が知られていないですよね。

（石田委員）
広報誌とかで周知はしてるんですけど、親にしてみたら、小さい町なので役場ってなるんですよ。でもお母さんにしたら役場で関わった人ってなると保健師くらいだと思うんですね。なので、多くはないですけど、部署関わらず保健師に相談が来ることはあります。全部（向こうから）来ればいいですけど、来ないので。

（大口委員）
とりあえず保健師さんに相談したらどこかにつなげてもらえるんですか。

（石田委員）
上ノ国の場合はそうですね。大抵の市町村はつなげてくれると思います。

（小野寺課長）
以前、函館市の新聞に載ってたんですが、包括支援センターの中に福祉拠点を設けて、１０カ所くらい設けて、例えば学校やスーパーで周知をして、相談件数が３倍になったっていうのが出ていたんですけど、福祉拠点設けるにしても、大きい町と小さい町だと事情も違うと思うので簡単にいかないと思いますし、どこでもそういう悩みはあるんだろうなと思います。

（滝澤委員）
発達の遅れがある段階でも普通高校に行くケースは私も聞いたことがあって、本人は普通高校から就職して、やっぱり就職がだめになって離職して、知的な遅れ等がある方が、社会から自分を守る為に引きこもるんだと思いますので、そこをどう支援していったら良いのか、社会に無理矢理出そうっていうのは無理だと思います。ただ一緒に暮らしてる親御さんの意識だったり、関わりをどうにか改善にて、それにつれて子どもも変わっていくっていうようなやり方が一番なのかなと思いました。

（今西地域づくりコーディネーター）
引きこもってるときでも、仕事を探してるときでも、私たちが入るタイミングって言うのがあると思うんですよね。こちらと本人がマッチした時というか、本人が助けを求めているタイミング、それを見逃さないためにもこういう相談する場所があるんだよと言うことは家族は理解して、困ったときにこの地域ってどういうふうに支えてくれるのかということを、ご本人に伝えられなければせめて親御さんに伝えておかなければならない。小さな町だからこそ周知があったら良いなと思いますし、大人になってから、大人の発達障害というのが出てくるじゃないですか。私は関係ない、ではなくて、困ったときにっていうのはもっと広く周知されていたら良いなと思います。

（菊池主査）
話し合いの切り出しとして１８歳で分けているのですが、実際つながっている部分はあると思いますし、年代を分けずに読んでいただいて思うところを出していただければと思います。先ほど大口さんの話の中で、連携協議会で啓蒙活動をやっているとおっしゃっていたじゃないですか。昔と比べたら障がいに対する意識が変わって来ているとのお話がありましたが、具体的にどういう啓蒙をしたのですか。

（大口委員）
１０年くらい前かもしれないですけども、小学校の中で保護者が、学校から「支援学級で勉強した方が良い」と言われたことがあって、子どもにしたらその方がいいのかもしれないけ

ども、もし支援級を使うとしてもそのことは隠して欲しい、表面的にはそこに居ないことにしてほしい、という話になったことがあったんですね。それは、地域の人たちが、障がいに対する偏見がまだまだあって、親と言うよりもおじいちゃんおばあちゃんなんですよね、支援学級に入れるのがダメだっていう。そういうこともあり、地域に対する啓蒙が必要じゃないかってことになり、町の指導主事が、こどもの発達障害がどういったものか、年に４回くらい書いてくれて、回覧板で回すんですね。町全体に広まっていった。医療的ケアが必要な子を地域の学校で受け入れようというのがあって、函館養護学校から先生を呼んで、先生方が勉強してという体制を整えて、その子は６年間を地元の小学校で過ごして、ほぼ歩けなかったのに少し歩けるようになり、中学校にも行ったんですよ。その子の発達というのを地域の人が実際に見て、支援学級で学ぶと言うことがこういうことなのかというのが広まっていったのかなと思います。前は、「あの子は施設にやっちゃえばいいのに」というような風潮だったけども、もう私の耳には聞こえてこないですね。

（菊池主査）

自分も、去年から障がいの仕事をしていて、知識として持っているものは一応あって、偏見はないと思っていたんですけども、知識だけだと実感まで至らないなというのがあります。月に一回振興局のロビーで障がいの事業所さんを集めて販売会をやって、普通に来て販売してお金稼いで帰って行くっていうのを見る機会があるかないかで違うなと感じた。触れる機会というのを確保していくことは大切だと思います。

（大口委員）

最初の頃は、健常児の子が、「あの子かわいそう」と言う言葉を使っていたんですが、それは違うよと言ってて。子どもたちには、誰もが楽しめることを考えようと言っていました。どちらかが我慢して合わせるのではなく、お互いが楽しく過ごせることを考えようと伝えていました。

（今西地域づくりコーディネーター）

８０５０問題がこれから少なくなるのかなと感じることがあって。早い時期に支援を受けている人が増えて、支援を受けることを拒まなくなってきているので、そういう風潮が減っていけば、その人達がその年代になったときに、８０５０問題って少なくなるのかなと思ったんですよね。サポートする側とされる側っていうのは、距離や温度差っていうのはなくなることはないし、相手の立場に私たちはなれないから、どんなに支援してもお互いにわかり合えないところはたくさんあると思うので、そんなに縮める必要はないのかなと思います。無いとお互いのこと主張できないから。近くなりすぎてしまっているところもあるのかな。私たちも１人でできる部分ってほんのわずかしかない。１０関わるのではなく、私は５、他の人が５関わるかたちで広げていく。障がい者もそんなに近くに来て欲しくないのかなっ

て。距離を保っていくことも大事なのかなと思いましたね。

（菊池主査）
まとめるというのも難しいので、どういうまとめになるかは分からないんですけど、今まで話し合った中身をまとめて、色々ヒントになる部分は出たのかなと思います。タイミングや距離感を図るのも大事だなと言うのは支援者の方も意識をする部分かなというのはありますし、今後、まとめた物を見て、見た人の支援になるようなものを作りたいと思いますので、少しお時間頂きます。3月町頃になるかと思いますけどもまとめたいと思いますので、それまで引き続きよろしくお願いいたします。今回これで地域づくり委員会、2年更新になりますので、このメンバーで集まるのは最後になるかなと思います。2年ちょっとやってきて頂いたので、ひとことずつお願いいたします。

（佐々木委員）
自分と重なる部分が結構あって、自分はラッキーなほうに動いたというか、運が良かったというか、そういう人たちが少しでも増えれば良いなと思います。

（滝澤委員）
職種が違う方々と意見交換ができて、すごく勉強になった2年間でした。ありがとうございました。

（松田委員）
本当に勉強させていただきました。「障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会」という名前ですけども、話しているうちに障がい者かどうかなんて関係ないなと思うようになりました。私自身まだまだ色々な偏見とかも持ってたりするので、修正できた機会でもあって、有意義でした。ありがとうございました。

（石田委員）
色んな職種の方と話すことはあまりないので、大変勉強になりました。ありがとうございました。

（大口委員）
障がい者が暮らしやすい地域づくりっていうのは、私の中ではずっと課題だったというか。正直1回目は法律の説明だけで物足りなかったんですよね。でもその後事例を出して頂いたり、みんなの意見を聞かせて頂いたりして本当に来て良かったなと思っています。ありがとうございました。

（佐藤委員）

学校という視点からお話しさせて頂くことが多かったんですけども、卒業した子たちがその後地域とどう繋がっていたのか情報が足りない部分があったので、そもそも支援センターとかが色んな場所にあるという情報もない状態でしたので、大変勉強になりました。ありがとうございました。

（菊池主査）

ありがとうございます。それでは３月頃に今回のまとめなどを書面で連絡して、このメンバーでも活動は一旦区切りになるかと思います。来年度以降お会いできる方は一緒に、引き続き地域のために活動して行ければと思います。２年間どうもありがとうございました。お疲れ様でした。